



徳倉久世志

三編

九

入遠13
2475
54



13  
2475  
54

成

成

内記

知の言を

ナ

ナ

薄念見身志巻海編九

余磯榮

一 正右衛門と胡村と嫁らん  
并 松清自女の道

一 松清が心成に右揮  
并 松一自書

鎌倉の因縁事志は編る九

正右衛門と朝村と嫁せしむる事

并松清貞女の道り出る事

月よむらひのさき花も風まらぬ  
が世なるもひらりて去るも  
朝の雨のさきひらりて松も  
局朝比とあはれつる金と



Faint blue ink bleed-through or ghosting of text from the reverse side of the page.



しるがひに君の姫姫の  
押ひのまを祀するまに  
情り又ま女をけしとつげ  
るま女をまをまをまを  
まをけしとつげし  
朝阿は給らんものまぬる  
君の給らんまをまを  
及よ申し利及の女をまを

あくまで姫姫のまを  
まをまをまをまを  
君の給らんものまぬる  
まをまをまをまを  
及よ申し利及の女をまを  
まをまをまをまを  
及よ申し利及の女をまを

とら 小栗の首を  
おろし 義隆とて 年次  
をたむむぐも 和内の一族  
てふも 報ふつう かくし  
ふりて 上総の 母と 新  
りしも 一年の ちり 由は 古  
る 君と 義隆と かくし  
はあつたよ かくし かくし  
と 知

て かくし 新  
さの 和隆と かくし 後日  
を かくし かくし かくし  
招きの かくし かくし  
中 かくし かくし かくし  
て かくし かくし かくし  
かくし かくし かくし かくし  
かくし かくし かくし かくし  
かくし かくし かくし かくし



のりきり  
りし  
と見え合  
尾君の  
後赤の  
底乃  
約  
あ

沿  
赤  
み  
る  
る  
舟  
と



るのふたぢがふく入の役はか  
もあめめはまの朝又の  
こがれかゆい入は目も  
変ちしるるのいとわらり  
辛苦むらういふはむか  
尼君ら松造はかまの  
根子とうり目あり終  
結傷の解りるに君を

見ら傍ゆらむか  
りともひけは  
るあうら乃結傷の  
海へ入るはむか  
しるるはひ余り  
又しるるはむか  
いへは後  
あはれは縁の縁は



後よりく〜 顔よりつけぬるの母  
と親直也中よりひま〜 人の  
母よりひうま〜 将軍  
のよ〜 法尾跡の由り知りてな  
らぬらぬひ〜 野のう〜 さま  
にら者の作れ随い〜 さんをも急い  
花よりあび〜 入毎に指図のそ  
〜 と海らば〜 のほお〜 いた

河平 緑紙の糸を法免下は  
ま〜 出やあ〜 と遠らぬ〜 ぬ〜 ぬ〜  
尾ら名波〜 名ぬあ書の中〜 糸ありぬ  
将軍の中〜 ひとねる〜 ぬ〜 ぬ〜  
よ〜 神中〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜  
あり〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜  
ぬ〜 のよ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜  
ぬ〜 指図のそ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ〜

事をぞか 婦人出せり ともむら  
るる こと 心 けり こと 事  
の 侍りて 昔 回ひ みる 局 事  
いふ こと 心 けり こと 事  
と 女の 母 こと 事 後の 事  
り こと 心 けり こと 事  
父母 こと 事 父母 こと 事  
いふ こと 事 父母 こと 事

少 事 私 事 事 事 事  
事 の 事 事 事 事 事  
父母 こと 事 父母 こと 事  
事 事 事 事 事 事  
事 事 事 事 事 事  
事 事 事 事 事 事  
事 事 事 事 事 事  
事 事 事 事 事 事  
事 事 事 事 事 事  
事 事 事 事 事 事

道ぐるり忠孝いとおもひたつらん  
軍ごころに名前の御つらふて御  
り御認まひるゝあてに女の家  
そむき名貞のそとと文あま  
るけの御の御守ひるゝを安  
福りし親の御恩をほぐし  
いとおもひ彼是あまひるゝを  
免角こが御あは法法の御つら  
り

ゆの御浮世と道まじおあま  
けりかゝ御ひらゝとあまを流  
しちやせしるに名御あまを  
いとおもひより名あまと客あ  
あるまの御ひらゝを法世の  
あまの御ひらゝを御見ぬあ  
まの御ひらゝを御あまの御  
と御い神を御あまの御あま

その心は母の心とて  
色とりどり作せり  
あつたは親の命とて  
女もてはる心は  
母もつあん  
るはあは親の  
あつたは親の  
母もつあん  
るはあは親の  
あつたは親の

一と清は母  
いとも母の  
しるは母の  
神あがは  
りも母の  
孝も母の  
とひも母の  
と母の



と形と習ひの浮世の世の世の世  
切に報と教と由是極の由  
兼しとあつしつらつらの由報ひ  
ゆまに陽者よまにひるまの  
と客ぬせいの由報ひひる  
も思ふことらつらつらつら  
陽者神もこと由はひるま

り後ひひてら名新客ぬの者  
のりぬてけぬり堅く輝ぬ  
ゆまに報とむも海らのゆ  
由是新より陽者たぬぬ  
の作らぬにらつらつらつら  
まにむもをぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ





てまゝ道なるのむかひに傍すなりけり  
とめがごとくあつた御くしとせぬひかり

に口唇を交すは心成と揮う

あふま

美 招しぬ自書のみ

を程に尼ら若らまのトとと親対  
子嬢しりんとてぬくしとせり  
かへとも高貞女とを授利との

つゝ心ゆく流るるよと出せせん  
ちみと親ひしつゝに若らぬと  
娘のり備はなすあしと客通るり  
と婿娘のさるるより親ひつゝ  
いづれとてしとれんとお母は  
りねも洗扱ふるまは是れ  
かゝるまを去りまゝと対と  
てお世せん招まひぬかぬ



よめくさへきさへき  
て内心へきさへき  
もさへきさへき  
名得心へきさへき  
とねへきさへき  
しへきさへき  
と局へきさへき  
しへきさへき  
しへきさへき

悦びまへけり  
風波へきさへき  
ね智へきさへき  
情へきさへき  
ねへきさへき  
まへへきさへき  
しへきさへき  
風波へきさへき

是と風一物々松一かよのさ  
しころりしとさいあまなりけし中  
中一風吹りり一ふ尼君を度  
松一由とまこひまい変とくまや  
か隠忍と大進おとをりい  
人をとくしとく一むる一  
風吹りり何あしをけし  
んやあ人も室科道ま

あつねも四瓶とるあを何  
の變りしとくあ  
道はるの目し身終る  
さればとて捨置く  
まよふとくさ  
中しとくあ  
胡阿と妻しとく  
風吹りり

身も数程ある国へけり輝世  
も風波の音合ふるも是れ  
是と乳一罷とく入んが心  
かゝる音のひらきし招き  
ひり歌かゝるは是れ神  
と朝時と流せんかゝる風  
をよも世のぬらふまの  
をらふひらきと推る

かゝる浮国へも自  
の道とくまゝとん  
かゝる神とては  
かり將軍の神と  
踏る者へ随ひま  
下地より音海へ  
一向のまはるる  
風波の音合ふる

させしむる下なるを——河津うらも  
随ひらくくもしう招の河津あまは  
とそん——ゆきを唯あきらめし  
神身の出處と由あり——下なるこの  
うの由思知るゆと流く——若くは  
こゝに居る者いふく——怒り志りふ風  
夢の實の言と乱れも——と二母色  
と習うく——たをと立ちのふあふ入りの

る——く詢法はせんと母友子又  
をとあ——のふけをの局を神祇屋  
の向う神の河津あまをいふは雅ま  
りり由甚の由側而依して行何  
放るもも——くけ深念をわ下向の  
ほもお智るもは——はり由身と  
弟のり——今別らと流の中隔ら  
と母のふらあまのあまの由免を

法一 諸君の申し連流の  
あるは道なるの御匹申し嫁  
んと尼君の御申しもおと人  
うらむも申しも申しも申しの  
しと御申しも申しも申しの  
とあり申しも申しの御人  
は申しも申しも申しも申し  
流の申しも申しの中は

命せん一掃と申しも申し  
んと申しも申しも申しの  
うらむ申しも申しも申し  
く申しも申しも申しの  
と申しも申しも申しの  
年月の申しも申しの  
今日自申しも申しも申し  
く申しも申しも申しの



の作は流ひては將軍のよき  
うきしき西宮の毎日は教訓  
ありしは自女の手を遠くひら  
しまたけ作をよきとせしむ  
花名所の西宮のうきしき西宮の  
西宮の味はしきの西宮も新  
将命はうきしきの彼をよき  
んかしのうきしきの西宮も

うきしき西宮の味はしきの西宮も新  
将命はうきしきの彼をよき  
んかしのうきしきの西宮も  
うきしき西宮の味はしきの西宮も新  
将命はうきしきの彼をよき  
んかしのうきしきの西宮も



りおしとあしとさつりてはれども  
局らとえ惜のさるまはらとあはれ  
かたはるまゝとせと必と凌ひらるま  
是のくもとせと終り傳名敷編  
唱ひ終りてと夜十八歳と一題と  
しく同書しくお果りりあるれ  
成るもとせとつらつら信義しりま  
るも是のまゝと次書なり

海合目録年表は編巻九終

